

# 編集者の手紙

——「金尾文淵堂」拾遺

石塚 純一

編集者が著者に宛てた手紙は、無数に存在するだろうが、世間の目に触れる機会は案外少ない。編集者の手紙は、本と出版文化について多くのことを語ってくれるはずだがあまり注目されてこなかった。先ごろ、大阪心斎橋筋の当時新進気鋭の書店であった金尾文淵堂おがえんどうの主、金尾種次郎が、明治三一（一八九九）年八月に詩人薄田泣菫うすまたきよあえんに宛てた手紙が発見された。この手紙は泣菫の子孫によって本年（二〇一〇年）、倉敷市に寄贈された薄田泣菫宛の膨大な書簡群\*1の中から見つかったものである。金尾の一群の手紙や葉書は三〇通以上にのぼり、ほぼ二人の生涯にわたっている。まずは一〇年前の編集者と著者との関係のありようを探る好資料を瞥見してみたい。

## ファンレター

その前に、編集者の手紙とは一体どんな性格をもつものなのか、私の経験を振り返りつつ、ほんの少し寄り道してみる。編集者の仕事の内、最も基本的なことがかつ大事なのは著者とのつきあいである。著者との関係がうまくいかなければいい本は作れない。

\*1

倉敷市が整理中の寄贈資料は、薄田泣菫の子息桂氏のご長女から、二〇〇四年一月に寄贈を受けた三五八点と、二〇〇七年一月に寄贈された九一点、二〇〇八年寄贈の三四〇点（この点数は仮目録を数えたもので未だ正確ではない）。また泣菫の弟鶴二氏のご長男から、二〇一〇年に四一五点の書簡資料が寄贈された。目録（仮）の一ページ目に並んだ、泣菫に宛ての差出人の名前を列挙するだけでこの資料の重要性が理解できよう。後藤宙外、野口米次郎、徳富蘆花、徳田秋声、里見敦、永井荷風、菊池寛、三木露風、島崎藤村、蒲原有明、与謝野晶子、与謝野寛、北原白秋…。

著者との出会い方はいくつかあるけれど、基本は誰かの紹介で直接対面するケース、そして意中の著者に手紙を書くことである。手紙はemailが増えてきた今日も最も重要な手段であり、出発点から最終の局面である本の刊行まで、二者の間に濃密な空気を作り出す。それだけではなく、そのやり取りを通じて相手との理解を深め、本のイメージを互いに膨らませていく作業でもある。

なかでも重い意味を持つのは、著者に原稿執筆を依頼し、出版企画を認めさせる手紙である。「私はあなたの仕事に惚れています。ぜひお原稿を執筆していただきたい」という意思を相手にどう伝えるか。編集者それぞれ知恵を絞り、手練手管を発揮するから、その手紙には個性が表れまさに腕が試される場である。突きつめれば編集者の手紙とは一種のファンレターであり、ラブレターなのである。

だから公にするのは一寸ためらわれるような性格がある。電話ももちろん要所で有効性を発揮するが、電話では絶対になわなない手紙の威力がある。約束までに原稿を何とか書かせる催促の手紙、校正のやりとり、また造本デザインについての相談などさまざまに局面で手紙がものを言う。そうして著者の手元には膨大な手紙が届いたはずだが、後世に公開されることはほとんどない。それは編集者の手紙が取るに足らないものと考えられたからだけではなく、世辞を含んだ手紙と捉える向きもあるかもしれない。

数ヶ月前の新聞に、中央公論社の名物編集者だった瀧田樗陰（一八八二—一九二五）の遺族（孫）から、作家の自筆原稿（六七作家二一四作品）や書簡（五六八人分二七二通）が、日本近代文学館に寄贈されたという記事が出た。<sup>\*2</sup> 瀧田樗陰の手元に作家たちからどんな手紙が届いたのか、やりとりの片鱗がうかがえて興味あるところだ。このように作

\*2  
「北海道新聞」二〇一〇年七月二四  
日付朝刊

家の手紙は大切に保存され、個人全集などに収録されることが多い。しかし編集者が作家に宛てて書いた手紙が公にされることは珍しい。作家などの遺品を調べれば、まだまだ見つかる可能性はあり、集めて読み返してみる意義はあるだろう。

編集者の手紙からは、まずその著者が書いたものが当時どのように評価されていたか、原稿完成までの具体的なプロセスや、編集者のコメント、さらに出版社で決定された初刷りの部数や著者印税（著作権料）のこと、さらに造本・装丁のデザインをめぐって伝えられる意図や編集者個人の志向性、アイデアを思いつかせた種などもわかってくるだろう。

これらは書物の出版の裏面史と言ってよい。新しいデジタル技術の下で書物づくりが大きく変容している今日、見えにくくなりつつある一冊の書物をめぐる人間の営みに分け入ってみるのは意味がないことではないだろう。作品論とは違った書物文化の一面が何が見えてくるはずである。

### 『金尾文淵堂をめぐる人びと』その後

さて、この度発見された一群の手紙は、弱冠二〇歳の金尾種次郎（一八七九—一九四七）が、気鋭の象徴詩人薄田泣菫（一八七七—一九四五）に宛てて書いた手紙である。

泣菫は二二歳だった。のちに近代定型詩の最高の完成を示したと称され、「ああ、大和にしあらましかば、いま神無月」〔『白羊宮』〕などの詩で愛された薄田泣菫。二人の若者はどういう状況で出会ったのか。

明治三〇年（一八九七）、無名だった泣菫（薄田淳介）は、雑誌『新著月刊』（丁酉文

\*3

『白羊宮』泣菫の第三詩集、明治三九（一九〇六）年、金尾文淵堂刊。

社)に「花蜜蔵難見」という詩を投稿した。時の編集長後藤宙外がこの新体詩に注目し、泣菫を高く評価し、読者の評判も悪くなかった。その後、訳あって後藤は春陽堂の雑誌『新小説』の編集に移るが、そこでも彼の詩を載せている。一方、当時の『帝國文学』（東京帝国大学文科を母体とする機関誌）は、雑誌で厚遇される泣菫を「高等の学未だ修めざる所なり」とケチをつけ、大学も出ない若造を帝大出の大町桂月より大きく取り上げた『新小説』編集長の後藤宙外を論難した。これが論争の種となって文学界は話題騒然となった。

大阪の書肆金尾文淵堂がその経緯を泣菫の友人平尾不孤から聞き、それならば薄田泣菫の詩集を刊行したいと名乗り出たのだった。金尾文淵堂は幕末からつづく書店で、金尾種次郎は父の死（明治二七年）により店を引き継いだ。元々仏教書肆だったが、若い店主は自らの意思で文芸出版へと方向転換しようとしていた矢先のことだった。ちょうど時期が重なったことが、泣菫の窮地を救ったわけである。このあたりの経緯について筆者は『金尾文淵堂をめぐる人びと』（新宿書房、二〇〇五年）で書いた。

拙著が目論んだことの一つは、多くのすぐれた書物を生み出したこの一〇〇年間の出版文化の草創期に、出版者は何をどのように考えていたのかを探ることだった。第二次大戦後間もなく、歴史から消えてしまった弱小出版社である金尾文淵堂をとりあげた理由もそれなりにあった。日本の出版社は小規模のものが大勢を占め、消長を繰り返してきた。一握りの功成り名を遂げた著名な出版社よりも、特徴あるリトルプレスの検証によって、日本の出版社のあり方を考えたからである。文淵堂と関わりのあった作

家たちが残した断片的な証言を拾い集めて当時の出版社像を再構成していくのだが、記録は少なく、一部推測や飛躍的な考察を伴わずにいらなかった。中でも金尾種次郎が、薄田泣菫というまだ無名の詩人に出会い、その詩集の出版を最初の仕事に選んだまさに出発点がやや茫洋としていた。肝心の本人の証言も何も残されていない。薄田泣菫のわずかな回想や同時代の雑誌記事などを手掛かりにして、出版に賭ける金尾の意気込みを探ったわけである。

本を書き上げて五年の歳月が経ち、私自身の関心も文淵堂から離れがちになり、異なる方向へと向かっていったときに、倉敷市の薄田泣菫顕彰会の三宅昭三さんから思いがけないお手紙をいただいた。金尾文淵堂が泣菫に宛てた書簡が二十数通も見つかった（遺族からの寄贈）というのである。これは放っておくわけにいかない。夏休みを待ち二〇一〇年八月の初めに倉敷市役所を訪ね、ご担当の秋山剛氏の協力の下二日掛かりで書簡類の山を見せていただいた。作成されつつある目録を頼りに、文淵堂関係の書簡の実物を手にすることもできた。また三宅昭三さんのご尽力で作成された電子ファイルと目録および金尾文淵堂関係の翻刻の複写をお預かりすることができた。

薄田家の親族（孫の代の方）からの寄贈資料は大きく分けて二つあり（注1参照）、その詳細については現在、青山学院大学の片山宏行氏を中心とする数名の近代文学の研究者が手分けをして整理解説中である。したがって全体像とその位置づけや解題等の発表にはまだ時間がかかると思われる。<sup>\*4</sup>

どうして薄田泣菫がかように大量の文学関係者の手紙を有していたかといえば、彼が大正期に入り（一九一一年）、作詩をやめて大阪毎日新聞の学芸部に勤めた（まもなく

\*4

本稿の校正をしている最中に、倉敷市の三宅昭三氏より、ご自著『泣菫小伝 九』（薄田泣菫顕彰会発行、二〇一〇年一〇月）が送られてきた。これは薄田泣菫の評伝として氏が書き継いで来られたものである。今回は、新出の書簡を元に『暮笛集』の刊行をめぐる経緯の詳細を、泣菫の側から綴られている。友人の平尾不孤や松尾哲太郎、後藤宙外のほか、金尾種次郎の書簡が一点ごとに紹介されている。本稿と併せてお読みいただけると幸いである。

部長職につき一九二八年に病気で辞めるまで）からである。新聞小説をはじめさまざまなエッセイや記事取材の依頼等で、多くの文学者との交流が長く続いた。泣菫の名は『暮笛集』や『白羊宮』（ともに金尾文淵堂刊）の詩人として有名で、一目を置かれていたことが文学者たちの手紙からも読み取れる。泣菫は文学者であり、かつ実に有能な編集者（記者）だったのである。したがってこの資料群が文学史的な価値を持つことは確かであり、その全貌が明らかになる日を待ちたい。

その中でやはり私の関心は編集者の手紙にある。

著者から読者へ——本は出版を通じて届けられてきた。江戸時代から明治に入り、活版印刷に洋本という形態へと変化する過程で、「出版」はその制度を整えてきた。印刷、製本、販売のそれぞれの分野で追求された工夫と連係し、一〇〇年の間に編み出されてきたスタイルである。

著者——本——読者という一見わかりやすい関係の中であって、出版社の働きは実はわかりにくいものなのではないだろうか。企画や原稿取りまでのプロセスといった出版社の活動はなかなか表に現れてこない。著者と編集者の閉じられた一対一の関係はさらに捉えにくい。そこに密室的な弊害がなかったとは言えないだろう。編集者の手紙は出版業の実務的な仕事や制度からもはみ出し、捉えきれないといえる。

金尾文淵堂の最初の手紙は、明治三二（一八九九）年八月に、現岡山県倉敷市に住まっていた薄田泣菫に宛てて発信された（手紙の翻刻は先に紹介した三宅昭三氏のものに基づく）。

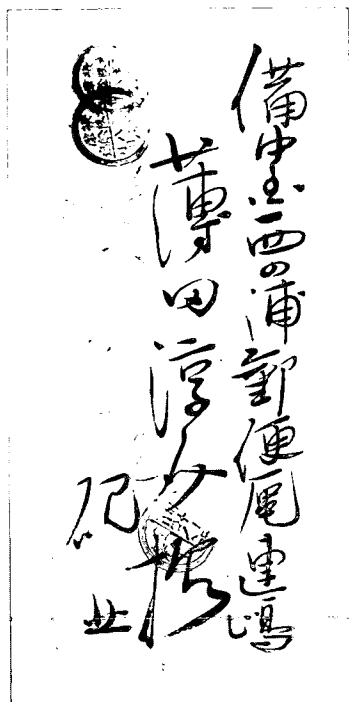
金尾種次郎書簡（第1信）

〈封筒表〉 備中国西の浦郵便區連嶋／

薄田淳介様 硯北

〈封筒裏〉 八月卅日／大阪市東区南本町四丁目卅六番屋敷／文淵会事務所（印）

着信局日付…（明治）三十二年八月三十一日



封筒の表書き住所に「備中国」とあるのはもちろん明治以前の国名で、明治八年には岡山県となった。泣菫の生家があったのは浅口郡連島村（現倉敷市連島）である。明治三〇年当初「備中国」でまだ郵便が届いたのである。

謹啓仕候

筆硯益々御多祥之由大賀

奉り候小生等儀当地に而

当春より文淵会なるものを

設立仕り月刊誌ふた葉

刊行仕り来り候處近々隆

盛に相向い大に喜び居り候後藤

宙外氏等も客員とし而毎々

注意を玉はり居候へ共未だ平尾不

孤氏に面会仕らず遺憾と存じ居候まゝ

先夜訪問仕り非常に利益する

ところ有之同氏もふた葉の為めに

充分の盡力を玉はるべき様仰せ

下され候事一同大に喜び居り候

其際あなた様の御事情

くわしく同氏より承り乍失礼

何となしに御慕はしき心地

仕り将来文学書肆とし而世に

打ち出でんとするものゝ責任義務と

しては是非共不遇の大詩人の

御物も世は君女下り可なりと大に

御物も世は君女下り可なりと大に



概し、たゞ、可成、重臣、の、介、も

津集、上、版、の、義、御、願、申、上、候、次第、に

在、候、今、夜、平、尾、氏、を、介、し、而

の、赴、き、御、座、候、何、共、御、禮、の、申

候、也、と、申、上、候、也、十、才、の、夏、母、に

別、れ、お、申、上、候、也、父、と、失、い

家、に、是、日、一、人、の、妹、あ、る、の、み、

業、務、も、盛、大、に、至、ら、ず、候、へ、共

将、来、ハ、聊、か、代、に、な、す、と、こ、ろ、あ、ら、ん

と、期、し、居、り、候、幸、に、後、来、萬、事、御、引、立

御、教、示、を、玉、は、り、度、願、上、候

詩、集、出、版、の、事、に、つ、き、て、は、平、尾、氏

に、く、わ、し、く、申、を、き、候、通、り、此、の、度、の

件、ハ、利、己、主、義、を、以、而、仕、り、候、事、に、て

無、之、候、ま、ま、一、切、あ、な、た、様、の、仰、せ

通、り、に、凡、て、を、致、し、度、只、小、生、の

希、望、仕、り、候、事、ハ、只、々、此、の、不

遇、の、詩、人、を、世、間、に、紹、介、す、る、こ、と、を

得、ば、結、構、に、存、じ、候、何、卒、く

作物を世に紹介すべきものと大に

相感じ乍ら即夜平尾氏を介し而

詩集出版の義御願申上候次第に

御座候今夜平尾氏より御返事

の赴き拝承仕り何共御礼の申

様も無之候小生八十才の夏に母に

別れ十六の秋また父を失い

家に只一人の妹あるのみ、未だ

業務も盛大に至らず候へ共

将来ハ聊か代になすところあらん

と期し居り候幸に後来萬事御引立

御教示を玉はり度願上候

詩集出版の事につきては平尾氏

にくわしく申をき候通り、此の度の

件ハ利己主義を以而仕り候事にて

無之候まま一切あなた様の仰せ

通りに凡てを致し度、只小生の

希望仕り候事ハ只々、此の不

遇の詩人を世間に紹介することを

得ば結構に存じ候何卒く

皇太子御即位の御慶賀

幸に御賢推を玉はり度くふた葉三冊

誠に失礼に候へ共平尾氏を介し而

座右に呈し申候 新体詩欄の

見るに足らざる実には心外の至りに

候へ共何分皆々未熟者のみに而

大に閉口仕り居り候幸に御雄篇

巻章を玉はり、欄中の

不振を翻がへされ候で大幸の

至りに不堪候いろいろ申上度

こと共沢に有之候へ共、明日ハ

節季に而只今多忙に候まま

乱筆を以て右申上奉り候余ハ

後便にゆづり申候幸に御推

了 中后十二時

幸に御賢推を玉はり度くふた葉三冊

誠に失礼に候へ共平尾氏を介し而

座右に呈し申候 新体詩欄の

見るに足らざる実には心外の至りに

候へ共何分皆々未熟者のみに而

大に閉口仕り居り候幸に御雄篇

巻章を玉はり、欄中の

不振を翻がへされ候で大幸の

至りに不堪候いろいろ申上度

こと共沢に有之候へ共、明日ハ

節季に而只今多忙に候まま

乱筆を以て右申上奉り候余ハ

後便にゆづり申候幸に御推

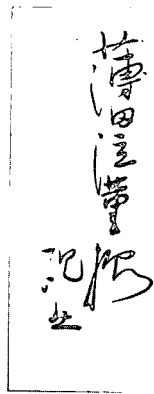
読何分共宜敷御頼申上候

早々

八月日卅日后十二時

金尾思西

毛筆で認められた候文に接し、まずは宛先の「備中国」から始まる、くせのある筆跡に意表



を突かれ、私は思わず背筋を伸ばした。本文からは、出版に賭ける意気込みと同時に著者への心づかいが伝わってくる。金尾種次郎がそこに居るかのような緊張感には、拙著の記述に誤りはなかったかという不安も含まれていたと思う。

『金尾文淵堂をめぐる人びと』において、薄田泣菫の詩集『暮笛集』を刊行する経緯についてかなり詳しく述べたが、これら新出の一連の手紙によって論旨に大きく変更を迫られるような事実はなかった。後藤宙外と平尾不孤<sup>\*</sup>によって不遇の詩人泣菫が文学界に紹介されたわけだが、この詩人の処女作の出版を金尾が引き受ける契機を、本書で私は金尾と平尾が大阪で出会った結果と推測した。しかし、この手紙（第1信）を読むと、不孤と金尾は手紙でやりとりを交わし、実際に二人が会ったのはこの手紙を書く直前であったようだ。

「未だ平尾不孤氏に面会仕らず遺憾と存じ居候まゝ先夜訪問仕り非常に利益するところ有之」とあり、続いて平尾から泣菫に金尾文淵堂で詩集を出すことの内諾を得、その上で金尾が泣菫にこの手紙を書いたことがわかる。金尾は泣菫の文学上の立場や境遇に同情して出版を決意する。

### 著者と書肆

さて、泣菫の事情を聞いてシンパシーを感じ、「不遇の大詩人の作物を世に紹介すべきものと大に相感じ」出版の労を取ろうと提案すると同時に、詩人に対して、「何とな

\* 5  
平尾不孤（一八七四—一九〇五）は、岡山中学以来の薄田泣菫の友人。東京専門学校に学び、評論活動を行い、大阪で「造士新聞」記者を勤めた時に金尾文淵堂と接触。

し御慕はしき心地」と書いている。まだ見ぬ同世代の憧れの詩人に抱く想いが率直に表現され、ハッとさせられる。また、「小生八十才の夏に母に別れ」と、言わなくともいような個人的な事情、一六歳で父を失い、妹一人を抱えて家業を継いだことが述べられている。現代では即時的なメールのやり取りだけで本ができる時代だから、著者と編集者との間に生じる行き違いやけんかなども含む交流が、どのような意味をもつかなど誰も考えないかもしれない。しかし、一冊の本が誕生する過程を通じ、そしてその本がもたらす余波として、著者と編集者の関係が本を通じて深まっていく例は多い。手紙というタイムラグをもつ手段がその振幅を大きくし、時にはさらに次の書物へと結びつけていく。こうした二者の関係性がかつては本づくりの背景に色濃く存在したと思う。著者と編集者の関係は複雑さを増し、こじれて時に破たんする場合もままあるのだが、時代を刻印するような近代の書物の出現を考える場合に一つの要素として無視できない。この第1信では自らの境遇をさらっと述べるに留めるが、続く手紙でも折に触れて金尾個人と文淵堂側の様々な事情が綴られる。

また、今は小さいがやがて一流の出版社を目指すという野心が語られ、著者の協力が必要だと迫る。「未だ業務も盛大に至らず候へ共、将来ハ聊か代になすところあらんと期し居り候、幸に後来萬事御引立御教示を玉はり度願上候」。個人的感慨と上昇志向を著者にしめす手紙は他にもある。明治三十三年三月二〇日付の第16信には、「小生も今しばらくは妻をめとらず候、小生が妻をめとり候様相成り候時節には文淵堂に編輯局を設けて居る時に候」とある。自らの結婚（実際に金尾は四二歳まで独身だった）について語られ、それに結び付けて文淵堂に「編輯局」を作りスタッフも配して…と金尾が描く

理想の出版社のイメージが語られているのが興味深い。明治も三十年代になると一般的な出版社として編輯局の設置が考えられていたとすれば、近代的な「編集者」像の成立を探るための手がかりになると思う。『帝国文学』編集子から、学歴・知識がないと誹られ、無名だが優れた感性と知性を持つ詩人と、無名の大阪の小さな書肆との共謀関係がここに誕生しつつあるのである。

### 初版の部数

名著といわれるような書物が最初に出版されたとき、いったい何部製作されたのか、なかなか正確に掴めないことが多い。現代でも初版部数は出版社の秘密事項である。ベストセラーになった本を過大に宣伝すること（「十萬部突破」とか）はあっても、ふつうの著作が当初何部くらい印刷されたかは出版社と著者以外知らない。

金尾文淵堂の最初の文芸出版である『暮笛集』の部数も拙著で明らかにできなかったが、今回の手紙で判明した。明治三三年一月二十七日の手紙（第6信）に、「初版千部は直様売れてしまふ様充分広告支度 何分初刷千部を売って漸く損益なし位の勘定に相成」りと書かれている。初刷は一〇〇〇部だった。実際にすばやく売り切れとなり、再版を続けて出版している。松村緑著『薄田泣菫考』は、『暮笛集』の初刷五千部を二ヵ月未満で売りつくしたという」と記すが、これも正確でなかったことがわかる。再版と三版の際に表紙の絵を変更したことは拙著でも取り上げたが、初刷が一〇〇〇部であれば、重版で一〇〇〇部、二〇〇〇部以上売ったと推測される。これはかなりの成功である。明治三〇年代に新体詩集の初版が一〇〇〇部というのは多いのか少ないのか？泣菫

の詩をめぐる雑誌で話題になっていたことが幸いしたのだが、新しい詩の言葉の響きが広く受け入れられたのだろう。最初の本の初版が売り切れたというのは僥倖に近かった。『暮笛集』の部数から、同時期に刊行された主な詩集、島崎藤村の『若菜集』（明治三〇年、春陽堂）や、土井晩翠『天地有情』（明治三二年）などの初版部数もおよそ一〇〇〇部前後だったということが類推できる。

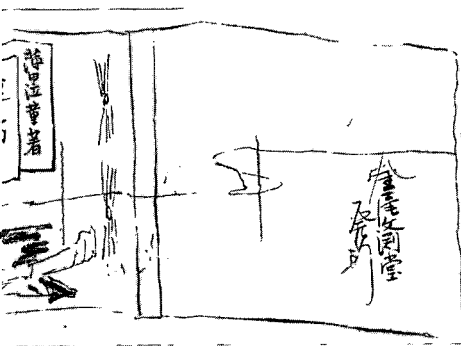
### 詩集の造本デザインをめぐる

金尾種次郎の手紙二五通に目を通して交わされた話題の中心は、詩集『暮笛集』の造本を巡るものであり、次に泣菫に接近する以前から文淵堂で刊行し始めた『ふた葉』（明治三二年一月創刊）という文芸雑誌のこと、その「新体詩欄」の編集を泣菫にやってほしいと依頼（了解を得た）、実際の編集に関わる話、さらに泣菫の二作目の詩集『ゆく春』をめぐる話題、そして泣菫が大阪へやって来る話である。

『暮笛集』の造本を巡る話題からは、金尾種次郎が本の装丁にたいへんこだわりをもっていたことが伝わってくる。自分の幼少からの友人で東京美術学校を出たての画家赤松麟作に表紙画を頼みたいがどうか、挿絵も入れたい、印刷はやはり友人の家がやっている印刷所に頼もうと思うと述べている。その後も進捗状況をいちいち報告し、泣菫に表紙の題字を筆で書くように依頼する手紙もある。第2信（抜粋）をみよう。

……（略）

書籍の形は四六判（わか菜集



金尾文淵堂の手紙（第5信）より。赤松麟作による表紙デザインの素案を示す。

一葉舟のごとき) か菊小判分(ふた葉半分の大きさ、天地有情のごとき)に仕るかの二途に御座候表紙も

藤村氏のごときものにするか或は

土井氏のごときものに仕るか、行は

何か御心算の有之候や御聞かせ

下され度く候なかには挿画を仕る

べしか、挿画は写真版か木版か

右悉く御さしづに從ひ如何様

にも仕るべく候「行く春」御起

稿の由、あなたさまさへ御さし支

無之候ハゞ是非クリカエシ小生に

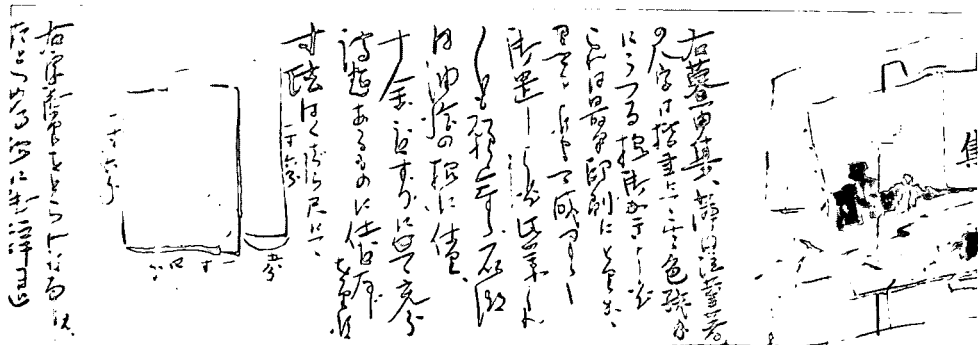
御ゆづり被下度此義くれぐれも

懇願の至りに不堪候

…(後略)

第2信(明治三二年九月二日、抜粋)

書籍の形式を藤村の『若菜集』のようにするかとか、挿絵を入れるかどうかとか細かく筆者に問うている。これに泣菫が一つ一つ答え、自分のイメージを述べたかどうかは返信が残らないのでわからないが、おそらく文淵堂の判断に任せたとと思われる。と



いうのは仕上がっていく造本の仕様は、手紙に示された金尾案に沿って進んでいることがわかるからだ。表紙画も金尾が「表紙は小生及黙仙——雑誌『ふた葉』の表紙の筆者——の友人に而 此度美術学校を卒業致し候赤松麟作君に……」（第3信）と提案したように、赤松麟作によるものとなり、第4信で、「暮笛集挿画の義「兄と妹」赤松麟作君に油畫を頼み それを新式の写真版として口絵に仕らばやと存じ候 此義御高見如何に候や」と問い、続けて「丹羽黙仙君より暮笛集の挿画をかゝして呉れと申し来られ候」と金尾の友人黙仙も挿画を描かせてほしいと言っているがどうかと問う。実際の本では口絵が1点、挿画1点となったので、おおよそ金尾の提案通りになった。

『暮笛集』が刊行された明治三二年一月の手紙は、赤松麟作と金尾種次郎連名で出されている（第7信）。筆跡が似ているので金尾が代筆したかもしれないが、赤松の文を一部紹介する。

学校でのホヤホヤの小生に

御著書挿画、表紙を

けがし申候事偏に

御はづかしく存じ候

何分始めの事にて、

新米の画工に新米の石版

屋にて工夫万事不成功、

小生も大の不満足にて候へば



嘸かしあなた様の

御こころの内推し奉候だに：

第7信 赤松麟作の手紙（明治三二年一月一日、抜粹）

自分が初めて手掛けた表紙絵と挿絵で、要領を十分に得ず、石版印刷も思うようにいかなかったことを詫びる内容である。文淵堂の周囲にいた仲間たちが泣菫の詩と境遇に共感して大阪で盛り上がっている様子が伝わるが、出来上がった詩集の装丁が、内容にふさわしい形を与えられたかどうかは疑わしい。薄田泣菫はヨーロッパで育った詩の形式ソネットを最初期に日本に移植した詩人で、自分ではこれを「絶句」と呼んでいた。キーツやロッセティやワーズワースを原詩で読み、「真珠のような美しい光に耽酔して居りまして、どうかしてこの詩形をわが詩壇にもうつしてみたいもの」（『泣菫詩集』一九二五年跋文）と考えていたように、明治の最新モダンだった。その詩を一つ紹介すれば、

浮雲

遠島がくれにはしるふねの

波間に薄るる真帆と見えて

黄色に染みたるはなれぐもの

秋の日風なき空をわたる

見よ、今朝明け、遠く飛びて

目路さす彼方に細り行けど

夕暮島根に雲はかへり

落つる日抱いて其処に眠る

知恵猶とどかぬ大空には

物皆はかなく人は見れど

放れば跡なき浮雲にも

常盤に絶えざる命である

ああかの漂ふ天つ領巾に

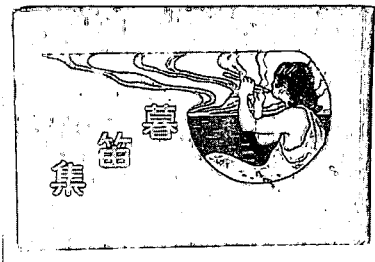
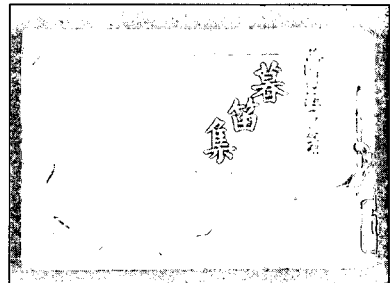
此世の秘密を染めて見ばや

『暮笛集』(明治三二年)より

このような詩集の造本として、金尾文淵堂の初版本は必ずしもふさわしいものとは言い難かった。泣菫は赤松や金尾の努力に感謝しているが、初版と再版で表紙絵を変更し、さらに第三版(明治三九年)に至っては、表紙絵を満谷国四郎にの描かせて、洋本仕立てのまったく異なる装丁に変えた。

初版や再版本がそれぞれの装丁になった経緯や、画家の選び方などがこれらの手紙からわかってくるが、煩瑣にすぎるので割愛しよう。一ついえることは明治三三年の初版

『暮笛集』初版



『暮笛集』第三版

から三九年の三版の間に洋本の技術が急速に進歩したこと、金尾文淵堂が大坂から東京に進出して印刷・製本の環境が変わったことが背景にある。

### 泣董の上阪

泣董への手紙(第2信)に戻れば、金尾の関心は早くも第二詩集『ゆく春』の出版に移りつつあり、原稿をわが方に「お譲りくださいたく」と懇願する様子がわかる。まさに手紙は語るである。明治三二年八月に始まる第1信から三三年六月まで、二三往復の手紙のやりとりがある。改めて気づくのは、この間に詩集の出版があるが、金尾文淵堂と薄田泣董は実際に一度も会っていないのであった。再版の準備と装丁の変更、雑誌『ふた葉』の編集に泣董が参画し原稿を読んで編集作業を行うが、すべて手紙のやり取りですましている。金尾はしきりに大阪に来るように促している。「貴兄御上阪はいっ頃に候や 三月なれば 可成廿日迄二に御上阪被下候はばどこへでも御供可仕」(第11信)。

泣董が大坂に現れたことを記すのは明治三三年六月一九日(第24信)の手紙だ。文淵堂の二階に泊まり、文淵会の仲間たち、文学同好会の面々が大歓迎し交流をもった様子が生き生きと伝わってくる。その手紙には泣董が早々と故郷に帰ってしまったことを知って、

北渚驚き(御帰国の急なるに)

方観惜しむ、今日辻子、菓子を

持ちて君に捧げんとて来

られしに、主は早や故郷に

在りとききていともなつかしげに

いといと名残をしく思はれ候

誰れ人もかくこそと於もひ候ニ、今

日同好会に来らむ人々はみなみな

君が過日の氣高き説を再び聞か

むとて来らるゝに、

あゝ君は去れり

……

と恋人でも去ったかの如く嘆く様子がうかがわれる。

### 雑誌『ふた葉』への編集協力

話は前後するが、『暮笛集』の印刷が始まったことを告げる、明治三二年一月一四日の手紙(第8信)で、金尾は泣菫に文淵堂の文芸誌『ふた葉』の編集に参画してくれないかと打診している。来春を期して雑誌を拡張し、改題して増ページ、「評論其他を大家に」依頼する計画を述べ、仲間の浩々歌客氏や平尾不孤さんも賛成しているのでは非にと迫る。末尾に「右御承引の上は同欄をあなた様に御担当玉はり候」とあり、これを泣菫は引き受けた。「詩欄」の充実ぶりは、翌三三年一月八日の手紙第11信に、「ふた葉御蔭にて、盛況、御喜び被下候、詩欄大に賑はひ可申、只管あなた様の御蔭で、幾重にもお礼申上候」とあることでわかる。

その後、『ふた葉』は明治三三年六月で終刊となり、一〇月から『小天地』と改題されて新たに雑誌が刊行される。その編集長には薄田泣菫が就くことになる。この経過は拙著で述べたが、その前段として『ふた葉』の詩欄担当があつたことはわからなかった。このように、いくつか細部について判明したことがある。それらによると金尾は着々と出版社としての文淵堂の拡張を図っていた。結果は拡大のし過ぎと、『大阪名勝図会』の失敗で急速に資金的に行き詰ってしまうのだが…。

また少し時間を戻して、文淵堂や泣菫と縁の深い与謝野鉄幹が東京で創刊した『明星』の動きに目を移そう。明治三三年四月に与謝野鉄幹の東京新詩社から『明星』が発刊された。日本におけるロマン主義文学運動の開幕を告げる雑誌の創刊である。同年八月、与謝野鉄幹と鳳晶子との運命的な出会いの場に、金尾種次郎もいたこと、そして泣菫と鉄幹の文学的友情、東京と大阪での出版販売の協働について拙著で詳しく見た。金尾の一連の手紙から『明星』の創刊についての感想や、鉄幹から関西における「明星」支部的な役割を頼まれたことなどが明らかになってこれもなかなか面白い。同年四月一三日の手紙（第20信）に、

……

新詩社の支部、まづ明星の売捌位は候

ふべし、会員に加入望みの人も候はば

周旋致すつもりに候明星につきて

鉄幹氏のやり方（むしる広告の）如才

なきには驚き申候、只今明星百五十冊依<sup>マ</sup>

託せられ着如何仕候

……

『明星』の発刊前に鉄幹に協力することを金尾は伝えていたはずで、新詩社の大阪支部を文淵堂は引き受けた。しかし実際に動き始めると、やや距離を置いて御手並み拝見という金尾の姿勢がこの泣菫への手紙からうかがわれる。文淵堂も雑誌を持っているのでやはりライバル意識があるのだ。また『明星』の発刊は全国の文芸誌に刺激を与え大小さまざまな余波を送ったことがビビッドに伝わってくる。明治三三年四月二八日付(第22信)の末尾には意味不明の、「明星はいやはや……、鉄幹と梅溪……。」とあり、同年六月一九日(第24信)では、

……

新声社の梅溪橋香衝突の

結果

梅昇新声社に入りて充分の

運動をすれども梅溪崇拜

の人々の読者多き同社は

日に哀境に於ち入り、橋

香再び筆を執るべし、されど

往年の意気なし

大阪の矢島書店、山本栄吉を

派して梅溪を東都より

迎へ、帰阪の上、大いに業務

を拡張して若葉を廃刊

してよしあし草の改題

関西文学を盛んにして青年文叢を付録して

創作評論青年文淵の

三つを成功せしめんとす

爰に於て我文淵堂の執るべき

運動は如何!!!

……

文脈がわかりにくいのが、東京の新声社（新潮社の前身）にいた高須梅溪が大阪に戻り、同年の八月に関西青年文学会（金尾も高須も晶子も所属）が中心となって与謝野鉄幹を迎え、九月に大阪における明治初期の文芸誌『よしあし草』が『関西文学』へと改題されるといった出来事が続く。これに関わる記述だろうと思われる。さらにこれは推測だが、翌三四年四月に起こる「文壇照魔鏡事件」につながる与謝野鉄幹と高須梅溪との対立関係が示唆されているように思われる。金尾文淵堂発行の『小天地』と競い合う『関西文学』、ようやく活発化しはじめた大阪文芸界の様子がうかがわれる。ロマン主義文

学を標榜する『明星』の創刊だが、この手紙はまさにその時点で大阪の文芸関係者がどのように受け止めたかをよく表している。『明星』が東西の文芸界の震源となったことは確かだ。「我文淵堂の執るべき運動は如何!」、若き金尾は薄田泣菫を押し立て、『明星』の向うを張って本気で文芸誌『小天地』の出版に乗り出そうと考えていた。

#### 金尾種次郎は近代的の「編集者」か

さて、明治三〇年代の金尾文淵堂の手紙は、大阪の出版のありさまを伝えてなかなか興味深い。当然のことながら金尾種次郎が時代を代表する編集者だったかといえはそうとは言い難い。本屋の主人といった方が適切で、編集者と呼ぶより経営者というべきだという意見もある。しかし著者に原稿を依頼し、本づくりについて相談するなど編集者としての仕事をこなし、著者との関係性を深めていく。その過程で手紙がなくてはならぬ役割を果たしたことは、*email*時代の今日も明治時代も変わらないことがわかる。

ここでやや唐突だが、現代の一人の編集者の手紙に触れたい。それは平凡社の編集者、故内山直三の手紙である。内山はかつて私の良き同僚であり、敬愛する編集者であり、親友だったが、私情で紹介するのではない。ある著者が彼の手紙を自著のあとがきで引用しており、私は初めて彼の著者宛ての手紙を読むことになった。それは歴史家丹生谷哲一の著『検非違使』（平凡社ライブラリー版、二〇〇八年）にある。本書の元版は一九八六年刊の同名の平凡社選書であった。内山直三が編集担当で、丹生谷氏の論文を集めて一書にまとめたのだ。それから二二年の年月を経て、ライブラリー版（文庫本）



として甦った。その間、一九九五年に内山直三は病に斃れた。まだ五〇歳だった。生前の九三年に書かれた内山の手紙は、著者の心を深く揺さぶり、著者を動かしたようだ。

### 著者を動かすもの

内山の手紙は、丹生谷の新著『日本中世の身分と社会』（瑞書房）を著者から贈られた礼状として出されている。本を貰ったお礼につづけて、

「うれしさとお礼の気持ちを伝える言葉をさがし文字にうつそうとするうちに、どうして自分が先生のファンなのかこれまで無意識のままに感じてきたことを改めて考えてみよう」と思い、「先生にファンレターを書くのも久しぶりなので、ついでにおしゃべりしたいことがたくさんあるような気もして」

と軽い調子で、この手紙を「ファンレター」と書いている。最初の選書版『検非違使』が出版された後、六年もの間、関西の著者の家を訪ねるなど親しい交流が続いていた、その上で書かれた手紙だが、著者の仕事の性格やその歴史叙述の魅力について適確かつ軽妙に評している。まず直接的には褒めずに、自分が私淑し現在その著書の編集を手掛けている西郷信綱（古代文学）の文と仕事を称えて、返す刀で丹生谷の文に触れている。

「もうひとつ、私が好きなのは丹生谷哲一という人の文章。これは誠に不思議な代物で、一見すると、無愛想でガチガチの——渴いた喉に砂を押しこむような——硬直した学者の世界の約束事に律義に従うもののように見えて、実は骨太の幹にも若芽がつき花が咲くような——」



丹生谷哲一「検非違使」（平凡社ライブラリー）

と、日本中世史の論文にも関わらずその文章が好きだと述べ、どうしてこういう文が書けるのかを考えたという。

「まずその論の道筋を（著者と一緒に）追っていくことが可能であること。論を立てるとはどういうことであるのか、それを辿っていくことがどんなに楽しいことであるかを教えてもらっているような気がします。」

と、読み手が一つの論を著者と共に辿れるような書き方であることを指摘し、さらに日本中世の制度や抽象的な関係を対象に論じているときにも「その向こうに血のかよった「人間」が見えている」から、中世のことについての知識がなくても、どこか自分に関係があることと漠然と感じられる点が魅力だと述べる。そして丹生谷の歴史叙述のもっとも特徴的な部分について、「ごく小さなことのように見えるもの、ふつうには見逃してしまふようなこと、そして大仰な記述の行間にこそ、大事な鍵がひっそりと息づいていることを、思い知らされる」と語り、深い部分で確かな連関を形づくる「歴史」を看取ることが面白いと思うという。つまり、この個所だけではないが編集者内山の手紙は、著者の仕事の本質に迫っている。本を深く読む理解力を示し、著者の仕事の社会的な意義を力説する。著者の心を掴む手紙の技といえればそれまでだが、内山を身近で知っている私には、本当にこの人の仕事が大事だということを率直に述べることによって、著者は動かされていることがわかる。手紙は著者を動かす力を持っているのである。「あとがき」で長い手紙を全文引用したあとに続けて、著者の丹生谷哲一自身が次のように綴っている。

「文面にもあるように、これはわたしの『日本中世の身分と社会』（塙書房、一九九三）に対する礼状であるが、自ずと、氏が中世史研究にどのようなものを求めていたかを記している。この手紙が、当時のわたしをどれだけ元気づけてくれたことか。そして何よりも、亡くなる二年前、四十八歳の誕生日の一日を費やして、このファンレターを書いてくれた氏のことを想うと、わたしには謝すべき言葉がないのである。」

内山直三は、自分がこれかと思う筆者とじっくりと向き合って、謙虚に誠実にかつ読み手として鋭く接し、いい本を作り続けた。そして著者を選び、ずばりとその心に飛び込む方法として手紙を使っていた。長年すぐ傍で仕事をしていた私だが、彼の手紙の中身まで覗いたのはもちろん初めてである。

編集者の手紙が公開されることは稀である。しかし、本来それは公にされるにはなじまない性質の、相手だけに向けて精魂を傾けて宛てた手紙である。手紙の本人が亡くなつて十数年を経てなおその言葉、その手蹟を思い出し、古い私信を保存してあとがきに紹介したのは、丹生谷氏だけが知っている、編集者内山とのつながりの証といえるだろう。そして版を変えて新たな文庫にこの一書が収まったことを彼と分かち合うことが叶わず、その後の氏の仕事の読み手として彼がいらないことを惜しんだにちがいない。

明治の若者だった金尾種次郎の手紙と現代の編集者の手紙とは、作品（論文）の評価に触れているかどうかといった大きな違いや、文芸と歴史学の本の編集の違い、時代の違いもある。しかし、「備中国」に書き送った金尾の「何となしに御慕はしき心地」と

いう手紙の文字は、薄田泣菫の詩への愛情を彷彿とさせる。会ったことのない金尾から次々と届く手紙が泣菫の心を励ましつづけたように、手紙が本を生み出す長いプロセスの産道の役割を果たすことは確かだろう。

故内山直三の手紙がライブラリー版（文庫）に紹介されたことが、私の心を強く捉えていたところに、金尾文淵堂の手紙が発見され、この二つを結ぶものは何だろうと考えながらこの一文を書いた。結論は平凡で、昔も今も編集者の著者への手紙は、本づくりの核心にありながら、出版という制度的な仕組みからどこかはみ出す領分であって、著者を動かす護符のような存在ではないかとも思う。百年前の手紙が出版文化の表に出ない精神を伝えてくれた。